

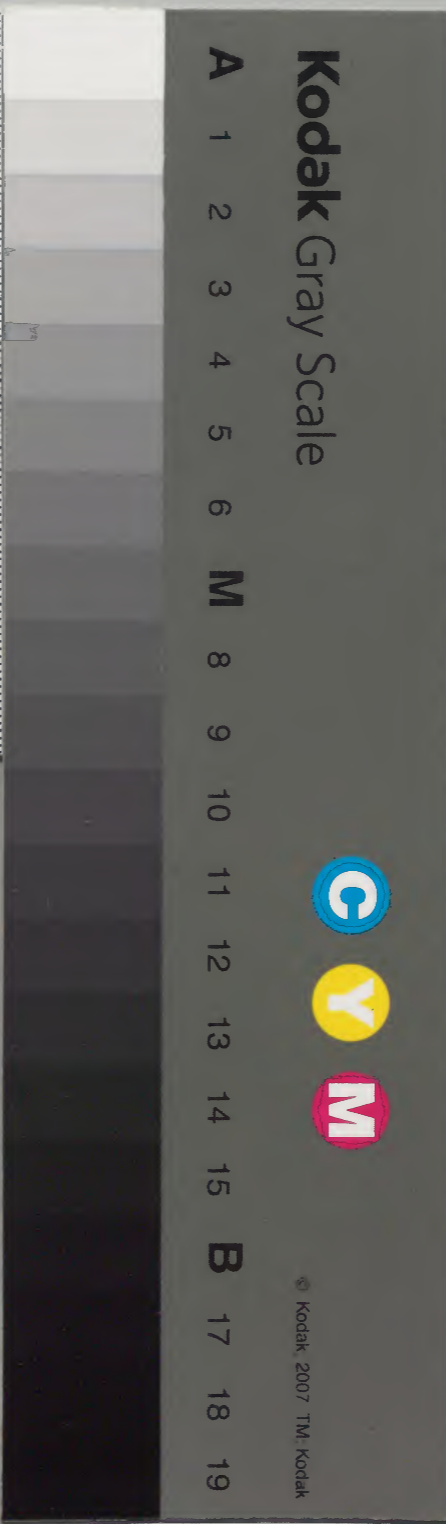
重修真書太閤記

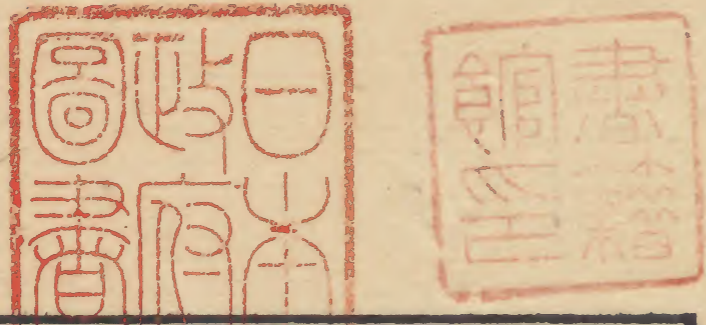
五編 十

538	一	和
一	二	書
一	二	門
0	一	
冊	架	函
號	類	

一七	一六	和
一	二	書
一	二	
一	一	
架	冊	函
號	類	

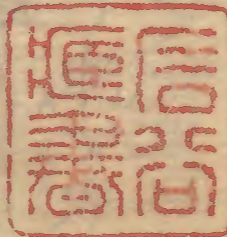
内閣文庫	
番號	和 16221
冊數	110(50)
函號	171 39





重修真書太閤記五編卷之廿八

津野文庫



町田久成獻納之章

羽柴秀吉鳥取の城を圍む事
并鳥取城中困窮の事

天正九年六月廿五日羽柴筑前守中國退治とて
播州姫路と首途を相從ふ侍へ播州作州備前但馬
の國人都合三万餘騎織田殿より加勢の兵士一万
餘騎總勢四万餘人と六万餘騎と沙汰しけり隊伍
整々として天地を轟くは因州へと進發し但
州出石より著城ありて國中の仕置と糾し七月五日
因州より著し鳥取丸山の兩城とくるくと追取卷て

大岡巴五編卷十八

攻く秀吉の本陣に摩尼帝釈山あり諸勢をわ
けと持口と定む南に黄母衣衆北に白母衣衆西の
方袋川と千基川の間中村孫平次一氏山名大藏
大輔豊國蜂須賀彦右衛門尉正勝小寺官兵衛尉孝
高加藤作内光泰木村隼人佑木下備中守荒木平太
夫神子田半左衛門尉等陣をとる東表に織田殿の
援兵一万餘騎鳥取と丸山の中間に右もる雁金山
あゝ織田於萬宮部善祥坊宇喜多の加勢明石飛驒
守長船紀伊守福田五郎左衛門播磨崎監物宇喜多七
郎兵衛岡越前守以下八千餘騎相ひく陣を取
又毛利より後詰の來りし時押入りとて秋里村

一城と築ち萩原七郎左衛門尉一万余騎と差
副て渡口と守をとりし灘の邊に淺野彌兵衛
尉并に丹後田邊の警固船の大將松井佐渡守康之
等四五百艘くび並へたる舟印沖津塩合の浦風よ
吹きひうして丸山の東口より羽柴小市
即秀長素山修理増屋隠岐守漆田の某但馬の山名
右衛門佑北の方より垣屋駿河守礒邊泰亀井武田
箒部以下錐と立るの地もなかく屯る陣々の芝土
堤高く築ち柵二重三重に結を墮廣さ四五間くら
うにろくせ堀丈夫に付矢窓重く切夜ハ一間二間
の間挑燈とくげ置たり用心堅固ふとて警衛嚴

重あまの空翔鳥もたやとく舞うて城中の兵士誠は網裏の鱗圈の中の獸ふ似て遁と出へる路もなま秀吉本陣の堀とい夜々白紙よて張たれり遠目ふの白堊付し異あふ又京都より亂舞の堪能者多く呼下し日々夜々鼓うせ融々陶々とめてちまをうあまの長陣は退屈さをすうの謀ありて秀吉毎日二度は乗物よて諸陣を廻りて勇氣ととめけるの深き思慮あまへ一同様なる乗物と二川二三十間隔て昇とたまの何さう秀吉よて何より供奉の乗物といふことを見分得ととあうしとや城中よてち只寄手の陣々を見

りしと徒ふ日とらうの術あうあまれ軍のあれりと足輕と出寄手と呼引しとも筑前守の軍令嚴密ふして一人も取あふのなく只折々鉄炮打出のち城兵もまゝ漫近川うは城と寄手の陣の間は袋川と云川あうて渡瀬ふりげれちさう得を爰よ吉川式部少輔經家森下入道中村對馬守と呼近づけ評定あけけり斯て空しく日を暮さんうの一夜討して頃日の眠とさまをえと申けし森下入道中村對馬守羽柴の陣中堅固よて勿々間を得を却て變を招の基あまへ只三家の衆の後詰をよつて内外ひと

しく責いらんこ十全の策をさへく存いと申けし
ら此頃見怖を敵陣のあつさよ何とも可然と一
同しけるよもう經家も止を得とあつら夜討の評
定を止めけり

小瀬甫庵本ふ天正九年六月廿五日筑前守姫路
と立て因州に至る過る处在々所々放火をさめ
取鳥の城下に至る廿六日の夜軍評定してまの
遠巻よあり廿余町を隔てて新城を構へ高山と
本陣ふ定め手賦法制よるに沙汰し廿八日の朝
より取巻三重四重よ及つて附城の普請は七月
朔日より鋏初ありて十日頃ふちちや堀槽二階

門堀不日ふ出来をう湊川みち舟橋を掛乱杭と
ふり四方よ堀をり鹿垣を結廻し十町くよ三
階の槽と立騎馬の武士廿人射手百人鉄炮百挺
をちめ置五町くよ番所を作り番士五六十人を
入替く夜番廻番蟻の熊野参りたる如く透間も
なく本陣の鐘時と告むい大将の陣の太鼓槽々
の小太鼓一度ふ打立てりまひと一築地の内よ
へ十町もの町屋を立因伯の商人軍市と立さ
り又城中よはりのとあれる十日廿日の糧のこ
みして程なく餓ふのそめくと見ゆ
藝州までも筑前守の取鳥を圍攻る由聞えり

吉川駿河守元春後誥のしめ出馬をとりゆとあり
 とも伯州の南條小鴨あさうは勇氣をふるひ國中
 を濫妨あしけるあまう是とも打棄あくるさよあ
 らひ如何せんと謀を廻らしけるうち二日数うの
 うしうち取鳥よて何むと心苦敷あめふらめ去
 とも城の要害よけとい容易攻あるとさるへさよあ
 らひ但兵糧あそ少うるへも如何よりして兵糧
 を運ひいれささんと船手輩へ下知しけとい毛利
 勢の船手の中より新見左衛門尉有地右近うけむ
 ろう頃て大崎といふ処へ打寄て西三日様躰を窺
 ひしりとも爰に敵の陣を去るところうし廿町あ

をへ両陣の間隠るふへ隈もちり向城の用心は
 けれの首地新見の両人力とよめて引返を然り雲
 伯の船手より入させるとして鹿足民部少輔と奉
 行とて軍艦十餘艘ふ穀船五艘と引纏て湊川近
 く漕寄夜半ふ舟と入んとせし長岡藤孝の警固
 船ふ松井佐渡守康之と大将として加悦勘十即以
 下敵船へ乗掛けるよ衆原才助あつ先ふ立て炬火
 と抛入く敵船と焼立攻めくる松井一番ふ鹿足
 う船へ乗移し鹿足のあかみ海中へ飛入たう松
 井う即等村尾四方助小舟あて追掛同く海中へ
 飛入遂ふ鹿足を捕へて頸とく松井村尾と具し

て秀吉の本陣へ参上しげまへ着しむひ羽織を
 脱て村尾に賜たる斯てのち城中糧のあく乏しく
 籠る處の百姓町人等饑腸の鳴を休めんと城の尾
 崎へ出て菓あたと拾ひけるを秀吉の本陣あけ
 ず早うとの若めの共掛合せ此菓拾ひよ出しの
 と少々討取けし城兵安うらひあめひ因幡侍の
 尾崎某伏せんとて羽柴方と討取て引返しをこし
 い色と直しけれとも城中兵糧絶けし士卒は三
 度と二度とあし一度分と雑人よ與へたしして日
 夜の後誥の來らんこと待居けり寄手の陣よ
 筑前守へ加藤清正蜂須賀家政兩人とよひて城中

定て兵糧盡困窮ある一搦手の峯よのめり様子
 と窺ひ來るへ但敵兵うち出るとあり共取合ふ
 ことあつとと捉られ即從十人許を搦手へ廻りけ
 ると城中ののの見知て經家よりくと告げられ經
 家五百騎とらうと伏て兩人とあつ兩人の城の体
 とと見濟し引歸さんとあを處へ伏兵起り一人
 も餘しとひめさげるや清正大木の蔭よりくと
 半弓を以て廿餘人を射殫しけるよ即等あけける
 木村又藏井上太九郎森本義大夫のつともよく働
 る蜂須賀小六手自二人と打取猶も切立さう立進
 みけるよ經家う兵へ此日頃糧よ飢つる疲あうて

おのふりとも戦くれと清正家政兩人の打取首とも提くくして實檢入城中の容子くくく演説あしあつ秀吉われあし小付の高名あつと殊の外に感賞ありと也

經家森下入道中村對馬守自害の事

并鳥取落城因幡國中平均の事

斯て城中兵糧盡とて十月中旬及び草木の葉を食盡し牛馬を殺してあれを喰ひ後よの將士秘藏の名馬の殘し乗替までも喰ひ盡し果つて人の馬を盗と喰ひける間ぬとまれと油斷あく昼夜用心なりたるける雜人原の柵の外へとせ出草

木の根と堀取のちの敵の目の前ともいとも落る菓と拾らんと近寄の情なく寄手の鉄炮あてあれと討たると味方の死骸を引くと切分てあれを喰ひあるひの手負ていませぬとも是の深手なう助めるとあつあつ苦痛とさせんよう早く死うしとて無体な切殺し節々ともかしてその腦を喰ひ中あも佳味の首あつとて凶を碎るてあつとひ喰ふ有様鼠とふとくあれを取雀と網して喰ひけん昔語と今眼前に見るもうあつと

唐の張巡許遠う睢陽と守りける時尹子奇圍

まれ城中食盡けれらるるめの程ハ茶と紙とを
 食ひげらうとれも盡しうの馬を殺してこそと
 食ひ盡しうの雀と羅し鼠と堀をとも盡しとて
 巡り愛妾遠へ奴を殺して食ひそのうち追々
 城中の婦人を殺してこれを食ふこととも叛者
 あらとありとひひもあひひやらせしう
 秀吉此体を見て毛利家の葦斯の如き困窮と厭
 け城を守り居るこそよと憂いけこれ元就よ
 く仁義を以て士民を懐け元春隆景よく父の跡を
 續て家聲を殖さるる處とありて経家の即義實
 み感するよあまうあれとも罪なき士卒百姓等う

餓死とるると不便の至らう扱を入て眼前の苦痛と
 助くへと堀尾茂助吉晴一柳市助直盛と使と
 して城中へ遣らう吉川式部少輔經家お申ける
 七月の始し今日まで百餘日の籠城對陣勝敗ハ
 取々よそ時の運ふらうゆと今ふ於て遺恨あま
 しい早く城を渡り毛利加勢の面々の帰國ある
 候城中の士卒雜人一人も別条あく本業と相
 續らうひへ但如斯弓箭と取て兩陣相争ひ
 とかれ誰あても城の本人一二人自殺あるへ
 それよそ多くの人の命と助られゆとんと廣大の
 慈悲と申へてい秀吉う申入い条々少も相違なく

いと申させし城の中より野田左衛門尉小野太
郎衛門出向ひ禮義正しく取あし使者の口狀を經
家ふ告げしに經家あはれしく思案し申けしに秀吉
の申こさきし一糸々道理よ中うて覺つひ兵糧ふつ
より士卒の氣力衰へしに敵と打合ふとて果
敢敷事あるへうしに鉄炮ふ打とめられ弓ふ射お
とされんともささるる口惜るるへし然らば徒ふ
多くのものを餓死せしめんより城の本人三四人
自殺して士卒の命を助申へしと當然の正理とお
わえしに次ふ經家不肖あるとも大将の号を免され
し身也本國へ引歸さんといはるるやうしとて某

一番ふ腹切へくは大将さへ相果ひとくその餘
に詮なくひへし此旨筑前守へ懇し申さるるへしと
あうげると以て堀尾一柳立歸り此よりと披露を
秀吉あれを聞て此方より和平して歸られしと
云と聞て却て只一人自殺し多くの命ふ代らんや
いふに義心といひ勇氣といひ感とるるよあまうあ
う然勇士義烈の經家と失らんよ本意あはれは外
ふ一二人自殺あるへくはと申せしうとも經家更
に承引をひあはれ於て筑前守より廿四日堀尾一
柳を檢使とて遣はしけしに經家客殿ふ出て即
等志妻源兵衛ふ人錯と申付らるるよ心静し腹を

切てい撃と云けども源兵衛涙みくれうち損ト
けると経家らぬと云て首とのへし時やうく
み打らうけり然るも源兵衛らめ近習三人同
く自害しけるを野田小野田の兩人経家の首と桶
ふ入檢使よ渡しうきあれと請取秀吉の陣よ持
参りけとい江州安土へ送る遣らう信長の實檢よ
いもそのうち禪寺ふ葬り孝養せられ森下中村佐
佐木奈佐塩谷五人の首とい獄門ふ掛しとあり廿
五日筑前守の下知らうて藝州らうの兵士をら
め雑人等の餓てはうれの共よあつ白粥を
あさへ漸々ふあまを養ひとのう心まうせよ出

いげうあまののち因州全く平均ふ治まうけ
るふらうの今年い帰陣し明年の春ふらうて伯
州へ出陣とへしと沙汰し置姫路へ凱陣をらうけ
流布本十月廿四日森下出羽入道道與中村對馬守二人い
主の山名と追出たる逆罪人あれい許されらうとて
自の家あて腹切奈佐日本助い海賊の本人らうその罪
遁とらうと云て佐々木三郎左衛門塩谷周防守と共
み丸山よ於て自殺をらうむといふ但この三人い天正九年
二月廿六日元春の家人山縣九九衛門尉春往を大
將よて丸山の城よ籠らうのちらう又一書ふ當國の
住人森下中村佐々木塩治四人い山名家人らうて

主の豊國と追出たる八逆人也奈佐日本助ハ海賊
あり此五人ハ輝元扶持して詮あり信長方ありも召仕
ふへさるゝあゝ因之諸人見懲のめ首と刎へ経家
事ハ加勢ちり檢使あり自殺無用と申遣を
し強ちみ大将の名とちりて自害しげりし静間
源兵衛のれと打福光小三即若鶴甚右衛門坂田孫治
即ハ経家と共に自殺と経家の首ハ安土へ上を信長
實檢の後禪寺に送り懇み葬送と云
又甫庵本あり吉川中村森下相談しげり我々
三人して城中の雜人と助へしと福光小三即を
使とちり浅野彌兵衛に付て筑前守へ申げしハ

筑前守三人の者とあそととあれと許けり
然者弥十月廿五日と約束しつ三人より酒肴
と請申ふより秀吉これと與ふ

御使札之旨令披露畢其城御両三主以一命可
相代衆命之結構秀吉甚以感被申し即柳十荷
行器十荷肴五種被送入候御望之儀弥不可有
相違之通御両三人ハ相心得可被申候恐惶謹
言

十一月廿三日

浅野弥兵衛尉

福光小三即殿

参四章

福光樽行器肴を廣間へ居しりハ即三人秀吉へ

降るめらへ君らの賜りのなりとて袋束にて書簡を拜し城兵一同へ酒と與へて廿五日早朝檢使と請城をけりし事憚入の同寺にて切腹仕るべくひとて寺へ檢使を招き三人共自殺と三人の首と用意と見えて箱よ入てけいひ時吉川う小性坂田孫次郎福光小三郎と違て死したるあり五の首と持参とあり今並へ記して参考ふとあり

重修真書太閤記五編卷之廿八終

重修真書太閤記五編卷之廿九

羽柴吉川馬野山對陣の事

并秀吉深慮歸陣の事

吉川駿河守元春鳥取城中困窮の由を聞さるへ後援を乞とて藝州新庄を立て雲州富田より着陣し軍勢と集むるといへとも各自國の事と閑暇なく折ふし勢少ありし元春旗本らうり三千五百餘騎よそ伯州へ打入八橋郡八橋の城よ入九月中旬より十月中旬まで三十餘日滞留ありけるよ近國の勢追々馳加らるて七千餘騎となるされと

も秀吉の勢ふらうへ対揚をさふあうされら
いし進發よ及むの毛利輝元小早川隆景も鳥取
後援とて元春よかと合をへさため雲州富田ま
て出陣ありたぬも南方九州の敵と押へん為所
所よ押への兵と残り備ふは是れ無勢ありて
進むれを殊に隆景の危ふき軍と好まぬ今少
軍勢と待付てあを向ふとて動うは其間鳥
取の軍急よして兵糧と乏しと由注進櫛の齒と
引う如くあれは元春一人小勢なり共出張とへ
鬼角とらうらふ彼城落去とば其詮あるくはと
七千餘騎と率し元春八橋と立て十月廿五日伯州

河村郡馬野山へ陣を替翌廿六日因州大崎へ陣を移さ
んとありける処へ鳥取の城昨日落去吉川經家以
下自殺せし由と告來りしうら元春大に驚き然に
因州へ打入秀吉と有無の一戦を遂んと勇まれけ
る処へ秀吉伯州へ立越南條兄弟を見續へしとて
出陣ある由聞え先陣既よ羽衣石山よ着くるを
申けるあり然らば待居て戦ふとて七千餘
騎と一手とあり柴堤つと柵門結京勢遅しと待
たり筑前守の斥候と出しあれと伺ふよ吉川元春
七千餘騎馬野山よ備と固め編ふ有無の一戦を決
とへしと思定めしあるく見へいと申げしは秀

吉目と閉ぢて思惟しておのひ出とてここを
あれ昔楠正成小勢を以て隅田高橋と破り大勝
利を得しとも宇都宮公綱小勢よて馳向ふと聞
く正成天王寺を引退さしとておのひを吉川勢
智人小勝とて是と以ておのひを吉川勢
思切て一人を生てうへらと踏止りて宇都宮
公小勢よ比へて我楠とてゆる引取へ
一譬へ十死一生と決定せし軍兵七千へ我手よて
勝りてさる兵士七万よ向ひ川へ然るよ此方
ころりよ四万余をうん三万余人も不足せりその
上よ此方よて吉川勢よて打出人とい思寄に敵

ち此方を目ようげく無二の一戦と思ひ設け也
とい主客の兵機大よ相違せり無益の軍計を士卒
と失ひんと良將の好まざる処をうとて既よ凱陣
の用意ようとてける處へ蜂須賀小六家政を
出て申げるへ御歸陣の御定誠よ十全の御計策感
入て候但吉川元春御凱陣の後鳥取丸山を落さ
し怒とこの羽衣石の城ようりて南條兄弟を攻
申へくその時加勢あることをひらけ城忽よ落し
然らんよ此後味方へ降参仕ひのあるへ
る因て御引取の節羽衣石岩倉南城へ兵糧と入
むよて加勢ある某おとよても殘さるよふへ

めと申ひきこへ父の彦右衛門正勝大に叱て申ける
へ若輩ののの分とて推參至極の申條うちや
てもげきこへ淺野殿とて諸歴々多くあつて居玉
つゝ其方の異見よ及ふへけんや謹て居へくと制
しけると秀吉聞ひ彦右衛門左様と云とさうと
小六が中処まことと理ふ當とて我等もどくよう此
事と案し居たり早々小六が申し任を兵糧を入へ
しこれとも兵糧をうう入んとせむ毛利付城の輩
又へ吉川が兵士ゆるら不知顔と見てらあるま
る也必定打出これを妨げんとあを成へて因て兵
糧を入ると深く隠し我勝軍とて競と以て吉

川陣と向て一戦とる由を披露とて然とて吉
川も南條小鴨が城と向ふとて捨置て我勢と向
ふと大事ととへ其時我勢もよ吉川と向ふ様
ふ備と立つへ然とて羽衣石の山續とある高山
へ引上り本陣とて吉川陣と眼下と直視し五色
の吹貫と山風と吹ふひうを雲伯の諸勢を一呑と
とへと氣色と顯むせると下知をいめ務と調練
したる武士あり何とも左右へ引分きたる吉川方
あてくと見付勇猛無雙と音と聞えし羽柴が勢
山上より打下して切掛ら味方の兵士一支も支
得と敗軍をへ抑この馬野山左へ湖水漫々と

て洪濤天と浸し右へ礮巖峯岬とて推蘇も脚を
絶たり後へ橋津川曲流して香象もたゆまなく渡り
めさるふたれ一條の橋をりさるる爰あて一戦あ
らんふふふをひら湖水へるめらるる大河の浪
ふ溺るるか二川の間と出へうらととおのひ川の
よの陣々太し騒動とんと大将元春とらも動せ
に筑前守と無二の軍とんと雲州を出しうら
福て思定めし處ありその上よ爰し陣と取し地
の利よ付て味方のさめてよ第一の地形ありとれ
のともありし時ハ十月下旬晝ハ味方弧よあさう夜
ハ虚よあさる筑前守けしとめさるる軍とあさる

宜しうらびと知たるあらん但無分別の猪武者う
寄來るまよさあもあさる寄來ハ湖水よ切とめ
ふ殺しよとへ然ととも両虎二龍の軍あり我等
必死とおのふへ敵ハ諸國の軍よ切勝て當時日
の出の羽柴筑前守我々敵よ不足ありめさる軍
をさるしとおのふ臆病者ハ今のらちとや逃よか
し元春更ふおれと怨ら伊て軍の用意とよとて
陣々の前よ隍をらと芝土手つと柵と二重よ結を
突て出へと門二箇所あけ敵の來らん道筋よ折え
もつゆのる白雪とより掃を明るおをしと待りけ
その上後ある橋津の川の渡橋を切て落し撃と

船を焼きて一重に打死の覺悟也秀吉斥候を
 出元春専合戦の用意とるものと聞とま一中
 國第一の智者と聞吉川駿河守をおそくも秀吉よ
 そらうとたるい卒波兵糧を入へと時節ありとて
 一万餘人の兵糧一二斗以て負を峯通りと小鴨左
 衛門尉元清籠り岩倉の城と南条伯耆守元續
 り羽衣石の城へ入らうけり毛利家付城ののの
 福でい兵糧を妨げんとその支度ありたりと
 由秀吉元春の陣へ切掛らんとせしける勢よら
 られて皆其方ふ向備らうけり夜いふう暗さ
 ららう油断して入課せしけるをくをけり

吉川方よてい敵山上らう下る勢定め弾丸の轉
 とるころやうとあひひ今宵限りの命らうを
 ふ心安く眠るんと弓よ矢をたけ鉄炮よ玉こめ
 馬よ鞍置鎧の上帯はらうめ悉の緒をゆるす
 切を今ゆくと待らうと夜いあのと明はくる敵
 陣の上の群鳥あうと聞こえけり羽柴勢よと
 つらきて吉川勢い敵の引退しを夢あもらう張
 いめし弓弦もそれとどのつら握る拳も緩まれ
 いさくの両城へあひひのまら兵糧を納さる
 この妬より怒うのらる甲斐もや斯て羽
 柴吉川両勢對陣と五日ふれ共秀吉吉川勢の必

死の氣を察しけしむ死武者も駈向ふく過と何
を遠うり味方よあして軍とせんめの共あつと
制しけしむ何さま大器量の大将うお意の外の心
入やと聞者感ふ堪さうけり吉川勢の小勢あつ大
敵の山上よ因て陣を張たれハ容易く打てうら
さもせぬ泛々と見合せ居さうけりちよ山上よ
う峯傳ふ引退けしむ山下あてをあれを知さうけ
るも断らう羽柴の兵士の眼ふあけさうけり敵を
ハ緩ととも來春うあつぬ雲伯よても亂入をんと
いふ氣力を増たうけり叔よ羽衣石岩倉へ加
勢を残り置とんハ蜂須賀小六家政さうらへ」と

て家政と呼出さうらふ小六あつ小残るへやた
らうよ申とことあうけりハ家政うことまう勇士の
面目これハ過命をゆさう守へくゆと申けり
おらう組下の士彼是五六人を相添兵士三千餘人
と從へく羽衣石岩倉の両城よこめ置たり十一月
朔日吉川元春惣勢と卒ハ馬野山を引拂ひ雲州さ
して帰陣せり
此時戸摩里城ハ河口刑部少輔久氏百五十騎斗
松ヶ崎城あつ小森木ユ允宇津吹條山の城々み
ふ元春方あて籠城せり
浮田直家其子秀家と秀吉よ諾とる事

并羽柴筑前守淡州退治の事

羽柴筑前守秀吉伯州を引拂ひ播州へ歸らんとす
る處に備前の浮田直家重病を引受存命不定なる
由と告來りしに直家備前へ立越岡山の城に入り
直家の病を問へし為りつら八郎を見參ふ入申さ
とて入城ありし由を申さしむに直家其懇志を
悦ひ苦惱を堪へて病牀へ請ひ因州長々の在陣容
易ありさる心勞たすべく一國平均兩城没落さそ
めし満足たるへさ旨を賀しそのうち我身めぐる
病ありさる存命旦夕に逼るり家督の事養子與
太郎基家蜂濱に戦死し實子八郎いよる九歳幼雅

ふして備前義作の兵馬を進退とるにあつらふと
明ても暮ても心障りありける如斯たもいふ
みよるるる何の猛さともあり筑前守の智謀
といひ勇武といひ世にゆるされあひし良將あり
あつらふ幼稚の八郎り事たのむ奉りたしとこの日
頃念をとり計らひ來臨ある奈實ふ以て生前の大
幸何事うらむと過ん態と見參ふ入て頼奉りしと
子息の上たれともふら折ふおらしはたる鬼も
めくも憐愍を加へ人とありむへその上よそ弓箭
取とへとも士卒を引廻とも教立あふくも然ら
む直家草葉のうけよる悦ふのこあらひ亡父興家

亡祖能家さてち遠祖代々備後三郎高德の靈魂までも君り恩頼といえんと涙と流して頼こころち秀吉も直家の心中と察しうの父子恩愛の切ある人感動をいむる天然の本性なれいそころち哀と催ふころち八郎の先年より秀吉の許より人質として有びるを今度由同道とあれい秀吉直家み向ひ病のとい是非もなき敵の寄るあころ何百万騎を物の負とあころあころぬ泉州あれとも尤様み弱らをもひてろ云甲斐あり八郎の秀吉り傍よりあうてろ某より弓箭と見覚えたれあさよてのといあさよいげきとも備前美作のあころ此日

本ありちと過分の大将となるアすころ心みおげあふころと申さころい直家あころ枕と上八郎を側近く呼居筑前殿この度の懇志よのほの武士の及ふ処あらぬころ兼て思ひ知あころ取別嬉しころあれ筑前殿の意よ違ふころあころ筑前殿の弓箭を見習ひ父の跡として備前美作と知とあころ國中の武士とよく養ひ我名と揚る追のめころとも先祖の名を降ところあころや教訓し又筑前守み向ひ幼稚ののころ人質として参らせ置し八郎と如斯めてころあころ筑州のかたころあころ押居て並しころあころ筑州の子息

めと思われ人柄も多く侍を引廻しむふを見
覺えつる故よや一際打上りて見えぬ但八郎いよ
た元服を同く直家う生て内ふ男ふあ
て賜らるひりやと望申けるあふ秀吉もう移
其用意あしたうけるよふ直ふ髻と揚て烏帽
子らせ浮田八郎秀家と名乗をうわあふく似
合たり筑州を眞の父とあひふあふ体と見
つと今とやあひ置と病中何の設もふ
くいと寂々けとともせめて一二日軍勢の脚を
休めゆるやと申はらう岡山ふ一日逗留あうて
姫路へ帰陣あふふ斯て直家へ明る年正月十四

日終ふむあふく然るよ吉川勢本國へ
引返しけと蜂須賀小六も播州へ引返しける処
へ安土より上使來り因州の軍功を賞をらと川
淡路國を平治あふと由を仰出され池田勝九郎
之助と檢使とて差下されけるよ十一月十
五日二万餘騎よて淡州へ押しける使者を諸城へ
遣らし降参をよとや否を問尋ねしむ抑此國三好二
族の領國あして安宅十河等居住をう
淡路常盤草ふ十人衆とゆふ洲本の安宅殿安
呼の監物殿湊の次郎殿炬口の炬口殿由良の由
良殿これいよ安宅同氏あり山田の嶋殿沼嶋

の梶原殿郡家の田村殿志知の野口殿阿那賀の
武田殿合をて十家あり又此外ふ七人衆といふ
に加茂主殿助柳澤越前守加集木二允真鳴彦太
郎白川刑部小田庄家あり
秀吉三好山城守康長入道笑岩と案内者として國
人等と招うといけるも元來笑岩は三好一族の内ふ
ても嫡流と不快ふして親しうらぬる永祿の大亂
あも一味を以兼て秀吉の智勇兼備をて悦ひ
秀吉の甥と養子とふし三好孫七郎秀次と云
秀次は筑前守の姉智長尾彌助吉房の長男あり
長尾彌助又は中村彌助といひ又木下彌助昌幸

といふとあり彌助まゝ三好武藏守とも云と流
布本あり

あつと親とあとい笑岩の先よたちて國中を誘
引しけるも由良の城主安宅河内守さゝらゝ歸伏せ
に防戦の用意ありける由と聞て秀吉池田勝九郎
之助を以てあれを攻さといけるも河内守終ふ叶え
に降参して淡路一國平均ありけとい降人ともを
池田ふあつげ安土へ登らる十二月二日秀吉は播
州へ歸り同月下旬歳暮の御禮として安土へ参上
ありしうら鳥取丸山より馬野山の對陣淡州征伐
の褒賞行なれぬ川秀吉と上客として信長手前の

茶事あり筑前守面目身ふあまうて帰國し明年の
毛利退治とて信長出馬あるべしと由と仰出され
秀吉の姫路へうえうけう

甫庵本十二月廿日秀吉姫路を立て廿二日安土
ふ來うしういその夜信長秀吉の旅宿へ至う廿
三日登城進物あひたうと由を注進を并を見
あへ

重修真書太閤記五編卷之廿九終

重修真書太閤記五編卷之三拾

於次丸秀勝初陣の事

并信長勝頼退治手配の事

天正十年正月羽柴筑前守秀吉播州姫路に在城て
國中諸士及び即從等悉く登城し新年の賀儀を述
るを請うれたる去年六月因幡國に發向し十月追よ
彼國一圓ふ平均し十月上旬歸國ありし處淡川征
伐の事と安土より下知ありあふしう秀吉長陣
の疲勞とも勞とを以即日淡州に趣き不日國中を
平治し降人と安土へ進上し直に歳暮の禮とて

参上まゐりあがり一夥ひとかた數獻上物かずけんじやうぶつ織田殿おだの諸侍しよじの目めと驚おどろ
めとけるめとけるうへ毛利退治たいち先鋒せんぽう手配てはいのめ姫路ひめじも帰かへ
う年頭ねんがしらの出仕でしも及およびと仰おほしらとします筑前守ちくぜんしも
暖氣ぬかきの時節ときせつと待織田殿まちおだのの下向げかうを迎むかへ奉ほうるへとさた
め播州路はくしゅうじと作つくらと掃除念そうじねんと入いつま旨めいめく申渡まを
しその身みの居城いじやうもあらうて長閑ながかんと春はると迎むかへ國人こくにん諸しよ
侍じと集あめ酒宴しゆえんと催もふし去年こぞ処々こゝこゝあらての軍務ぐんむ格別かくべつ
勲勞くんらうと賞しょうしらといハ一日いちにちの安佚あんえきも百年ひゃくねんの齡ねんと延のび
心地こころぢして衆人しゆじんあらわくと秀吉ひでゆきの深肯ふかきんと武威ぶい仁惠にゑも
帰伏かへふくしらふく粉骨こなほねの忠ちゆうと抽ひんをアとあらふふ
信長のぶながの出馬でうままでハ程遠ほどとほくあらう春はるの日ひと空ひらく

く過すさんと冥加めいがおとろし然者しかるもの近日しんじつのらち備前びぜんも
出張しやうちやうし兒嶋こじまも残のこるも毛利勢もうりせいを攻せめしとれらう
進まりて備中備後びちゆうびごと切取きりきり織田殿おだのの御待ごまちもうけまさ
さとやと頻しきりも勧すすめけるゆへ筑前守ちくぜんしもその勇義ゆうぎ
と壮さかあらうと悦よろこびたらう於おつた丸まることも具足ぐそくとさ
せとめし祝いわふし大将だいじやうとして出陣でしんとしむアとあり
筑前守ちくぜんしハとしても四十しじゆをあえて子ことしふかのも無な
り寂さびしらまは織田殿おだのの四男しよなん於おつた丸まると秀吉ひでゆきの子こもせ
るとして去年こぞもう此このら姫路ひめじも下向げかうありし也今年ことし元服げんぷく
して羽柴少将はてなせうしやう秀勝ひでかつとして秀吉ひでゆきハ織田家おだのけもして新参しんさん
の士しとしひしとしふ早賤はやせんの勤つとめらう段々だんだん勲功くんこうとして墨すみ

股の城主とあり長濱に移り小谷廿万餘石と并領
中國探題として播州と平均に治め因幡伯耆を切
鎮め備前美作を威服せしめ他は比類なく因
て織田殿も昔の藤吉郎よりあつた教國を領せし
大名あり天下無雙の男と仰らるしあつて柴田丹羽の
上より立織田家隨一の功臣として中國九州までも
打平げめと許されしと凡人ありぬ神智のめざは
処と知るへし爰は於次丸の秀勝一万五千餘騎よ
て備前へ發向ありけるよ當國よては宇喜多和泉
守直家去年より重病ありけるり正月十四日終り
むふり成行年五十四歳のまゝ惜りるるに齡あ

う秀吉岡山よ入てその遺跡のよ去年直家の一向
ふ頼りしとあれは八郎秀家の僅ふ十歳ありける
と家督とあり直家の弟浮田七郎兵衛忠勝家老戸
川肥後守岡越前守長船紀伊守花房志摩守同助兵
衛等ふ幼主と補佐し二國を治むる由とありて
らよ今度當國へ發向い秀勝具足するめの祝ひ兒
嶋の毛利勢を追拂はん迄の結構あるい浮田家出
勢ふ及ぶるいりつとも籠居し直家の中陰を修せら
るへしとて八郎秀家とい岡山よ残り止められけ
る
直家の妾某氏八郎秀家といひ女子一人をうむ

水間記五編卷三十一

三

然るに和泉守卒して後此妾筑前守に仕ふ是を
 以て秀家兄弟筑前守の愛顧を全く秀家の備
 前義作と安堵し女子の毛利宰相秀元の室家た
 らしむ蓋失行の人たる其利を知て其義を知て
 漫に義朝の妾常盤の再醮して三兒を活せしを
 法とて英雄ありとて媚せらるるを知と豈あ
 りとや
 兒嶋の麥飯山より小早川隆景より植木出雲守福
 井孫六左衛門兩人より八百餘騎をさしとへく差置
 けり秀吉秀勝一万五千餘騎をさしとへく聞て
 迎も掛合の軍のあるとてさしとへくあつた

も又一戦も及ぶ城と明退んとい後艱を
 めく傍輩の嘲も有りし叶ふ迄も一箭
 射て尋常の振舞やと諸卒と下知し植木福井真先
 立て防戦と秀吉の秀勝を伴ひ小高を圍み取上り
 軍とてけり勇めんといめくあつた短兵急
 めく立く攻させけり城の小城より堀堀とて
 も淺間あり成る勢いさつと八百餘騎寄手一万
 五千餘騎に比し物の負ふもあつた城中に
 こよ堪えりやあつたひけん植木福井今は是
 てとと八百餘騎を真丸とてあへ城戸を闚て打て出
 雲霞の如く渦巻て扣えり寄手一万五千餘騎の中

へ面もろく切て入蜘蛛手結果十文字も馳走り當
ると幸突立切立ゆきけし目よあまる寄手あれ
とも左右へむつと打開と中と明くを通りけるこ
もとも羽柴う勢へ大勢あり又取てうへへ取巻
めら毛利勢ものうれぬ處と思ひ切今日を限りと
戦ふゆき城兵八百餘騎大形討きて散々ふとを
あつたを植木福井いうあつてうい遁とらん敵
の中を切ぬけ藝州へ逃歸しと也秀吉大悦ひ諸
勢と下知して麥飯山へ馳上り毛利家よて取立た
うける若と焼捨て川ととも毛利方より支ふる者
たひとい秀勝初陣の高名とて勝開三度あけそ

大田記五編卷三十

とより姫路へ凱陣あり織田殿出馬の時日と定規ひ
その上よて備中備後へ出馬せんともつ岡山よて
引取その用意取々あうける処へ上方の飛脚到來
を何とやらんと云い織田殿よい今春信州の木曾
龍馬頭義昌御味方とあるうう甲州の武田勝頼
と打滅れさるゆとて二月上旬甲州へ進發ありむ

木曾龍馬頭義昌へ旭將軍義仲十八代義康の長
男ありて武田信玄の塔あり天正十年二月九日
義昌勝頼も叛し信長も降る因て信長甲州へ打
入んこと企て信忠と先鋒將とを十二日信忠岐

大田記五編卷三十

大内言上光孝三十一

阜を發と

然るに濃州信州の武田持の城々悉く明渡し其の勢破竹の如く遠州濱松も加勢あれは武田の滅亡遠くは秀吉もあつて軍馬を訓練しあるへし甲州静謐の後直に中國へ出馬あるへしとの下知あり秀吉されと承り弥中國進發延引たるへしとありひしつ岡山も姫路へ引返しけるめ織田殿年來の敵たる武田家と打亡とへしたる甲州へ出陣あり由然るに某居城は安閑とありへし御陣見廻のめ且に於次丸の元服して鎧者たりし武者あり并に初陣して一戦も

五

勝利を得たりと趣と言上をなるとして姫路も浅野彌兵衛小寺官兵衛との外歴々ありて残り置加藤虎之助清正福島市松正則等とありて馬廻り衆三百餘騎ありて三月十一日播州を發足し

勝頼新府中と出て田野の奥天目山に入り日也信長の去五日安土を發足し六日呂久の渡し著とありて七日岐阜へ逼留八日岐阜を發し十三日信州伊奈郡祢羽根に著し十四日飯田に著しと云い岐阜より祢羽根まで凡廿三里許山道峻也大軍の行路一日五里許と知へし木曾の降参り濃州惠奈郡苗木の遠山久兵衛尉友

大内言上五編卷三十一

六

政^{まさ}取次あり織田殿大い悦喜ま^{よろこ}し^む木曾の路
 開^{ひら}ふん^んより甲州へ攻入ん^をとたやと^りる^へ去^さい
 早々^{はや}打立^たへ^てとて手配^てを定めらる^る駿河口^{しゅ}より
 北条氏政父子遠州^とより濱松の御勢飛驒^ひ口より
 金森五郎八木曾口の信忠伊奈口の織田殿あり二
 月十二日信忠より従ふ人々瀧川左近将監川尻與
 兵衛尉毛利河内守水野監物同總兵衛尉森勝藏團
 平八郎以下五万餘騎とを聞え
 信長の勢ハ七万餘騎菅谷九右衛門尉野々村三
 十郎福嶋平左衛門尉下石彦右衛門尉等相從^あい
 と云明智光秀諏訪寺より如此日出度事も年來

骨折たる故と云ハ信長光秀を欄干へ押付と
 て骨折たと被仰て擲うとあり是明智の叛とる
 根本ありと云

勝頼木曾り逆心と聞て自向とて叶ふありとて二
 月二日二万餘騎と率し甲州新府中と進發ありて
 信州上の原より著陣の処上方勢追々發向の由注進
 あるより防戦の手分をありたりけりあり伊奈
 郡高遠城より勝頼の弟仁科五郎晴清と大将とて
 小山田備中守渡邊金大夫と籠らと大嶋の城あり
 日向大和入道宗英小原丹後守依田能登守安中七郎
 を籠深志の城あり馬場民部丞多田治部右衛門尉

横田甚五郎とて駿河口鞠子の城あり室賀兵部
丞持船の城より朝比奈駿河守屋代左衛門尉關五
兵衛尉田中城より芦田下野守と籠らるその外の
城々も相應に人数を加えてあれを守らる然共
勝頼武勇ありて人の諫を用ひて侍人を愛し忠臣
と遠さげざるは累代の老臣多く長篠の軍も
強死し打残されし將士も勝頼をうらむもの
多くしてあれを爲し粉骨と盡さんとありあめ
めく上方濱松の旗の手とてや否城を開て退散
しあるい塊を脱て降を乞ふとて信州の内あり漸
高遠より甲州方とて残るけり勝頼もくく

ち如何とおもひ小穴山入道梅雪遠州へ降参り
たりしりも勝頼甲府へ引返れ出陣の時二万餘と
聞えしも今ハ僅に三千餘騎不足さうけり松尾の
小笠原掃部大夫信嶺織田方へ降参り信忠の案
内者として二月廿九日高遠城小押寄ける城
主仁科五郎晴清ハ信玄の愛子にして武勇勝
し良将なれハ味方の城々の落る城をこしも意
介あり信忠の大軍と引負散々小戦ひ討死せ行年
廿六歳とりや高遠落去のち筑摩伊奈の郡一圓
小織田方とありにけり
晴清の首曲物入三月六日濃州呂久の渡り小

太閤記五編卷三十一

八

至りて信長の實檢ふ入信長六色を岐阜の長柄
河原ふ梟屯と云

勝頼軍評定の事

并真田昌幸忠諫の事

高遠落城して仁科五郎とくめ武田の勇士等数
多討死しし信忠より勝みのう直進んで
甲州へ寄る三月朔日駿州江尻城を穴山陸奥守
入道梅雪成りけるゆ濱松の御方へ降参しけるよ
る持船田中鞠子の城々何も聞怖し落たりし
る梅雪入道と案内者として甲州市川口へよむ
ふ勝頼この由を聞て甲府へ引返しけるよ三月三

日高遠の城落て仁科殿主從去廿九日討死ありし
と告来しし味方よ取て股肱と頼り仁科殿討
とむひてちとらか人力を落しけるよ遠州勢止方勢
追々責近つし由諸方より注進ありし只今ま
て三千餘と聞えしも次第落て今漸一千餘騎も
も足さるけり然るよ武田太即信勝生年十六歳を
ととも智勇兼備の若大将あれ進出でて普代重
恩の侍い多く討死して義名と揚臆病未練の者と
もい逃失て露命を貪るその上廿餘代相傳の地下
人さへ疎む様あるけり我國ありし敵國も同
前と云へし然らば武田の家の滅亡とへし時節到

武田家滅亡の事

来さる誰か昔より長久の家ありて人とも身と
怨むへさよあらし織田勢と引受けさざ能討死と
へ神速最期の御用意ありて然るへと勧めけ
まの長坂釣閑齋跡部大炊助をのこく命おしさふ
死の安く生に難し大将さる御身へ万死を道とて
一生と得とも申會稽の恥と雪むるとも申はあり
とや何れふも一旦何方へありとも御立退ありて時
の至ると待ともあふこと然るへくはめと申ける
によう勝頼両条いつとも定めりの猶預あしけ
ると見て真田安房守昌幸進といて御曹子の仰
られは処の勇士の本意よてもはもとて聞え

ひ又長坂跡部の申さる邊もとてめく覺えの
尤ゆる上州吾妻の郡岩横の要害堅固ありて四方
一条の路を開く然もこのうよ一人立の廣さよて
下へ數十丈の谷川底あうく上の巖風を立たると
る石壁青苔ありらあり實は天然の嶮岨さるよ
人の造作と經はる地と申へくはとの上味方の城
城小室岩尾上田をとりめ松枝安中箕輪あと取り
いてあれを助へて免角して年と經はるちよ累
代の支族重恩の即從をいよ馳集り可申矢玉薬
丈夫よ貯へ防戦三四年も及ひはらちあふあると
め織田家よも違變の出来さるへ然らる御関運

の期いそと申へり又弥御運つるに
その時よこそ御自害あるに
城七ヶ年別所り三木の籠城も五ヶ年ふ及ひ
信駿上四ヶ國を領し武田の御家あり百日も
味へむるに四州を攻取させむと餘り
ふ残念と申へり穴山入道の如き御一門の中
ても格別の高家と申殊ふ御後見あるにそれ
勸め奉りて累世の居城をいそと申へり
中の普請いそと調ふに不要害の地敵を引受む
んと御討策の善とい申へり急上州へ御関
と可然と申けるに勝頼此義も同上州へ趣

くへりと有所ふ當國郡内の小山田九兵衛佐信茂
めは織田家へ降参せんと約束あしける故
此度一忠節のめ勝頼父子と郡内へ退去せしめ
路次よとて討んと思ひしとあれ安房守の
申さるる吾妻要害堅固ふにゆへとも分内狭く
て大儀の計畧ありし御領分とい申せと
も武田殿の命ありし他國へ出奔あされしと
いととんと弓箭のさびよてゆへ某住い鶴の
郡の四方ふ山高く中ひろく兵糧玉薬ありし
分ふ大敵を引受て幾年籠城ありしとも事
いそ郡内へ御動座可然と勸め奉りけるに安房

守聞もあつと小山田の居城へ御移りあるは
只此處よりともうもあつせむへさほつひそ
の故に當國の地下人ともとてよ御敵の色とあ
ゆへち鶴の郡とも頼のうらひ四方ふ嶮岨あ
まとも山道垣うつて五人十人あつあつひて進
み川へ古府中と棄あつて新府へ移らとあつも
便利と要害よまをあつてひをとや然らん他
國とも御領知の上州へ趣りをおふを誰うと
みし申へ故殿の人の城人の石垣人の國人を
城と城とあつと仰られいひつていひあつ
當國の人々の如く御政道と怨と織田家の賄賂

あつて義理と忘しゆ城とたの石垣とあつめ
さつと國人御敵とあつひよとたとへ石垣崩と城
破と申へ如斯あれい國よて御合戦御勝利あ
あつていひつとも上州へ御立退あつて連々ふ崩と
石垣破い城とも御修復あつていといんう旧恩の地下
人あつ只今欲ようつと心せひつめへ申すつと
もいといと勧めけるもあつ然らんめめめめ
妻へ立退とあつて勝頼得心あつげと信勝も尤
然とて同意あつげもあつ真田の用意のあつ信
州へ馳歸けり真田出立のち小山田右兵衛も不興
氣もて御運の末あつとあつと御思案も聞成い

のりろ累代の某と御うとて近頃伺公の真田を頼まを
あまこのうていよその上五里妻迄の路次遠く隔と嶮く
女中の御越あんと尤難義に申て歎さける長坂釣閑齋
くそくくう小山田申処至極の上策と存れり郡内御関のち
吾妻へ御越しても不遅と存れ其上安房守の胸中とても打ちりせ
て頼せあふへいあ申けし勝頼又郡内へ落させあふと信茂
ふ下知あけし信茂喜ひ然へ御道の掃除申付りて小山田の郡
内へ立帰る

勝頼新府落の二条諸説さむくあて一定あり然共真田と小山田の論尤
人の知処あれ流布本あふ及よの信州落御撤落の評定あり申せと今其実
重修真書太閤記五編卷之三拾終

三 都 書 林

- 三條通升屋町 出雲寺文次郎
- 心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
- 同 博勢町 河内屋茂兵衛
- 同 筋木町角 河内屋藤兵衛
- 日本橋通二丁目 須原屋茂兵衛
- 同 二丁目 山城屋佐兵衛
- 同 芝神明前 小田屋新兵衛
- 本石町十軒店 岡田屋嘉七
- 大傳馬町二丁目 英子屋大助
- 横山町三丁目 和泉屋金右衛門
- 浅草茅町二丁目 須原屋伊八
- 筋違御門外藤籠町二丁目 紙屋徳八

